

## わたしはイエスの許で目覚めていよう

アドベントの第一主日を迎えました。会堂内部も整えられて、クランツの蠟燭に一本火がともりました。神は初めに「光あれ」といわれ、この世の最初に光を創造されたことが聖書に記されています。先週の終末主日が終わりを意味するなら、教会暦の最初の週は蠟燭の光が一本ともされた状態、つまりわたしたちの世の闇を照らすまことの光が来られることのかたどりで、

光は聖書では言葉と分かちがたく結びついています。神の言葉によって光が創造されたからです。「御言葉が打ち開かれれば光を放ち、無知な者にも諭しを与えます」という詩篇の讚美にもありますように、実に、神の言葉にこそ、わたしたちを照らす命の光がある、真実がある、愛がある。これが聖書の中心のメッセージであり、わたしたちの信仰の確信でもあります。そして、この神の言葉が人となって、わたしたちのところに来て下さったことを祝い、神を賛美し、救い主を礼拝するのが教会のクリスマスです。アドベントの期間は4週にわたって、この神がわたしたちの救いのために起こして下さった救いのドラマを御言葉を通して追体験します。神の言葉は出来事になるからです。約束のときがあり、告知があり、先触れとなる者が登場し、救い主の誕生が訪れる。全ての者が礼拝者として招かれる新しい出来事の始まり。その救いのドラマに立ち会うべく、わたしたちは今朝、この場に集っています。そして今朝、教会暦にしたがってわたしたちに与えられているテキストは、マルコによる福音書 13 章です。先週までイエスさまに十字架刑が言い渡される 14 章を読んでいたのに戻るのかと疑問に思われる方もいるかもしれません。しかし、このマルコによる福音書 13 章は、マルコの小黙示録(小さな黙示録)と呼ばれる教えで、

終わりの日の出来事、そしてその終わりの日に備えてどのように生きるかというキリスト者の生き様についてイエスさまが語られた個所です。アドベントとは、主が来られる、到来されるという意味を持つ言葉ですから、今日の聖書個所に照らせば、帰ってこられる主人を待つ僕として、わたしたちはどのように生きているか、生きるべきかを、ご一緒に確認することがアドベント第一週に求められる御言葉への応答なのです。

主は言われます。

「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである」その日、その時、とは世が終わる時です。終末ということですが、こういう時の理解は、わたしたちには分かりにくいですね。

世の終わりを思うことは、現代のわたしたちにとって現実的ではない。ひとつには時間の感覚が今とは違うわけです。今回、調べていて面白かったのが時間の単位でした。この個所では

「その日、その時」と言われています。それから後のほうで「主人が帰ってくるのが、夕方か、夜中か、鶏のなく頃か、明け方か、分からない」とあります。これは昔は日の出と日の入りが人間の生きる時間を区切っていたためです。「夕方か、夜中か、鶏のなく頃か、明け方か」というのは正にそうで、これはローマ標準だそうですが、3時間ごとに区切られているのです。6時から9時までが夕方、9時から12時までが夜中、鶏の鳴く頃が12時から3時、そして明け方が3時から6時です。電気がなかった時代は太陽が照明ですから、人間の活動も日の出前に始まり、日の入り後で大体終わるように区切られていたのです。江戸時代も二時間単位が一刻です。一方、わたしたちは「1分1秒を惜しんで」などと言いますし、電車が3分遅れて大騒ぎ

ですね。こんな分単位秒単位の世界に近代以前の人々は生きていません。時間の観測と管理は近現代の発明と言っていいわけで、逆にそれがわたしたちの意識を時間とスケジュールに縛り付けている。時間をコントロールし、管理することは現代人に当たり前に要求されるスキルです。そこでは自然のリズムを感じて時の行く末を見る感覚は失われてゆき、秒単位分単位で今に執着する生き方、内向きに閉じた感覚を生み出している気がします。早く、短くと、コンマ何秒の世界にばかり関心があり、大きな流れとしての時間を感じることが失われています。関連ですが、この時期になりますとおそらく皆さんはカレンダーを買われると思います。我が家も気づくとあちこちに猫のカレンダーが増殖していて、そこに数か月先まで互いの予定が書きこまれます。いわくこの日に会議、この日に出張、この日は入学式とか、だれその結婚式とか、こういうものはそれぞれが手帳や、カレンダーに予定として書き込める。しかし、人間が管理できないし、してはならない時があります。たとえば、来年のカレンダーのある日に、誰その葬儀とは書き込めない。結婚式の予定は書き込めても、葬儀の予定は書き込めない。人の生き死には人間の決めることではないからです。今日のイエスさまの発言はまさにそこを指摘しています。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

このことは神さまの統べ治められる時があり、その御計画は人間には知ることが出来ない、人間の分を弁えよという主張です。わたしたちは手帳やカレンダーに書き込めない事柄は考えない傾向があります。手に余るからですし、考えても仕方ないからです。しかし、死なない人間も、終わらない時間もあります。考えないからといって死がなくなるわけではない。死へ

の準備をしなくてよいということにはなりません。自然死、病死、事故死、殺人等々、思いがけない形で死は老若男女の区別なく平等に人を取り去るものだからです。被造物はすべて有限であるという動かしがたい真実があり、そのことはわたしたちの想いを越えているから考えないだけで、必ず終わりを迎える。それはカレンダーには書き込めませんが、父である神のお決めになる特別な時なのだということをイエスさまは仰っている。この個所で、わたしたちが弁えるべきことは幾つもありますが、先週の終末主日との関係で言うならば、この世界は主人が帰ってきたときに終わるという強烈な主張があります。逆に言えば、僕たちが終わらせるのではないという福音ではないでしょうか。終末と言われてもピンとは来ませんが、わたしたちは、わたしたちの生きている世界がどんどん悪い方向へ向かっていると漠然と不安に思っていないか。年々激しさを増す気象災害は現代文明がもたらす地球温暖化の結果でしょうし、70億を超える地球人口はこの星に決定的な負荷をかけ、絶滅危惧種は増える一方です。さらに戦後70年以上を経て、第二次世界大戦後に構想され、築き上げられた世界秩序が明らかに崩れ始めています。また戦争が始まるかもしれない。核兵器開発に邁進する国々もある。このたぐいの世の終わりはリアルでしょう。しかし、聖書が告げることは、世界は人間の破滅的な罪の結果で終わるのではなく、主人が帰ってこられ、仕切られた時に終わるといふ。この世界に責任を持っておられるのは僕ではなく、主人であるということ語っています。神さまだけがこの被造物の世界のいっさいの主であり、責任者であるという枠組みは揺るがない。この世界に変わらないものも、終わらないものもない。すべては過ぎゆく。ただ神の言葉だけが変わらない。永遠をもっておられるという主張です。この視点から、わたしに

貸し与えられた限りある命を見つめることが出来るかどうか、そこに信仰の知恵、弁えがあるのです。

しかし一方では、誰もその時を知らないならば、その時を逃さないためにはどうすればよいか。そこで目覚めていなさいと勧められるのです。ここで敢えて、イエスさまが、主人と僕の関係为例に引かれたことは注意が必要です。つまり日頃、主人とともに暮らした時に守っていたルール、言いつけを、主人が不在の間も実行しているかどうか、主人と僕の関係性のなかでは一番重要だからです。主人は僕たちの働きに応じて報いられる。清算を行うということが書いてあります。ここは「目を覚ましていなさい」と命令形で書かれておりましたが、むしろ願い求め、招きの言葉として理解した方がよい。目覚めていることは、キリスト者すべてが備えているべき本質的な特徴、主に結ばれた者たちの新しい生き方の基本姿勢と言えるのです。目を覚ましていなければ、この世と同じかたちを取ってしまうからです。そうではなく御言葉に聴いて、人格と人生と共同体を形作る。具体的に主から聴いたことを、わたしたちが実際に信仰生活の中でどのように現わしているか、福音に依り頼んで生きていくかを問うている。目を覚ましていくことの反対は眠りこんでしまうことでしょう。イエスさまが最後に十字架を前にして、この場面でも、またゲッセマネの園でも「目を覚ましていなさい」と述べたのは、彼らを守るためでした。わたしがこれまで語って来たことを忘れてはならない。互いに愛し合うこと、主の教えに留まって生きる群れに属し、そこで共に生かされる交わりを造り上げることによって、この世とは違う、神を礼拝する民が生まれる。それによって初めて主に召し集められた群れは、その働きを示すことができる。主の愛によって生かされる教会が神さまの御心を明らかにする場所となる。救い主

と出会う場所となる。そのために、召された一人ひとりがキリストと出会って救われた恵みに対して「目を覚まして」いなければならない。眠りこんでしまってはならない。互いに対する配慮に目覚め、主の教えに聴きあい、従うことで、教会が主イエス・キリストの思いの生きる場所となる。それこそが、主に招かれ、雇い入れて頂いた僕の、主（あるじ）に対しての誠実さ、つまり信仰の姿勢になるのです。「主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない」から、目覚めていなさい。この主人は眠り込んでいる僕を見てどうされるのだろう。それは書いていないですね。僕への罰は記されていない。ただ主人が残念に思うだろうことは推測できます。ゲッセマネで言い置いたにもかかわらず、眠り込んでしまったペテロたちに、主イエスは「心は熱していても肉体は弱い」と憐みと執り成しの言葉をかけておられます。決してそこで彼らを蹴り飛ばして起こすような真似はなさらなかった。僕の様子を思い計ることが出来る憐み深い方のもとで、わたしたちの人生を目覚めさせて行くこと、主の赦しの愛の中でわたしたちの在り様を作り替えてゆくことは有り難いことです。待降節第一主日の朝、わたしたちはこのことを胸に刻みたく願います。不安や恐怖のもとではなく、主イエスのもとに逃れ目覚めていよう。

お祈りいたします。